

## ベックスを さがし出す

「ベックスが いないのだが。丸1日、だれもベックスを見かけていないんだ。さがしてくれないかね?」と、フクロウのタフトが言いました。

「もちろんです。見つけたら知らせます。」と、グースが答えました。

「ありがとう。君たちが頼りになるって分かってたよ。」そう言って、タフトは彼女をさがし続けるために飛び立ちました。

ベックスは、ビーバーです。話し方がちょっとおかしくて、他の動物たちからかわれたりしていました。それで、ベックスが一言二言話すのを聞くことはめったになく、彼女の姿が丸1日見えないこともたびたびありました。普段から、他の動物たちといっしょに遊んだりおしゃべりしたりせず、自分のからに閉じこもっているのです。だれも彼女のことをよく知りませんでした。

ベックスは、フクロウのタフトに会いに行くのが好きでした。タフトは、決して彼女の話し方を笑ったりしません。タフトは、彼女がどんなにすばらしい動物か、ほめてくれます。そして、彼女が大きくなったら、自分の巣を作る川に見事なダムを作るだろうと話してくれるのです。



「どこからさがし始めたらいいかな？ ベックスと  
話した ことって、ないしなあ。彼女は いつも 自分の  
からに 閉じこもってるものね。」と、エドガー。

「もしかしたら、それが ヒントかもしれないよ。  
一人になりたい 時に行くような 場所を さがしてみたら  
いいかも。」と、グースが 言いました。

「それは、いい 考えだね。」

タフトが ベックスさがしを 二人に 頼んでから、1時間が  
過ぎました。二ひきは もう、彼女を 見つられないのでは、  
と 思い始め、ぶらぶらと 川治いに 下りて 来ました。

「シーツ。ガマの しげみの 間から、何か 聞こえた  
気がする。」と、エドガー。

「ベックス、君かい？」と、グースが よびかけました。

カサカサと ゆれていた ガマが、止まりました。返事は  
ありません。



「ベックス。もし君なら、ぼくたちはずっと、君をさがしてたんだよ。」と、エドガーが言いました。

しげみの間から、二つの目がのぞきました。「どうしてわたしのことなんか、さがすの？」口笛をふくような声でベックスが聞きました。

「タフトが、今日は君を見かけていないって、心配しててね。それでぼくたちは、君を見つけるのを手伝ってほしいって頼まれたんだ。」と、グースが答えました。

「じゃあ、わたしがいる所が分かったから、見つけたって伝えればいいわ。」そう言いながら、ベックスは去ろうとしました。

「まって、ベックス。話そうよ。」と、エドガーがよび止めました。

「それで、わたしのことをからかいたいの？」

「ちがうよ。君のことを知りたいんだ。」と、グースが答えました。

ベックスはカメを見て、それからリスを見ました。「わたしのことを知りたいですって？」



「そうさ。ぼくたち、君をさがし始めた時、君のことを  
何も知らないって気が付いたんだ。だから、君を見つけたら、  
友だちになろうって話したんだ。そしたらぼくたちは、  
2ひきじゃなくて、3ひきの仲良しになって、きっと  
もっと楽しくなるよ。」と、グースが言いました。

「本当に？」 ベックスは意外そうに言いました。

「もちろんさ！」と、エドガーとグースが口をそろえて  
言いました。

「ぜひ、お友だちになりたいわ。」と、ベックスも  
言いました。

「タフトに、ベックスを見つけたって、言わなくちゃ。  
それにさ、ベックス。笛をふくような君の話し方、ぼくは  
好きだよ。すてきだと思う。」と、エドガーが言いました。

「じょうだんでしょ？」と、ベックス。

「まさか。本気だよ。」

新しく友だちになった3ひきは、にっこりと笑いました。  
そして、うれしそうにおしゃべりしながら、タフトを  
さがしに行きました。新しい友情が芽生えたのです。

